

# 人格としての美 ～ 実践美学 ～

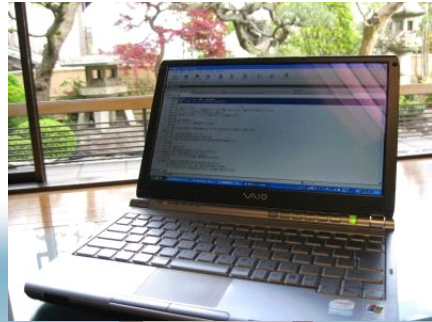
## 1. 世の流れ (一通のメール)

先日、一通のメールが届いておりました。

近藤 徳雄さん、このメールは、特別なメールです。  
今日は近藤さんに講演のご案内をさせて頂きたいと思います。  
中国古典の第一人者である〇〇先生の「中国古典に学ぶ乱世生き残りの知恵」です。  
〇〇先生は、全国各地で経営者やビジネスマンを中心に、  
幅広い講演活動をなさっています。  
中国古典における示唆、生き方、考え方こそが、  
いま我々に強く求められているような気がします。  
なぜなら21世紀は“真の戦略の時代”だからです。  
ある程度成長が見込まれていた20世紀とは違い、  
より戦略的な考え、行動が求められています。

- ・戦略のコンセプトを生み出す力
- ・戦略の基本設計を行う能力
- ・それを実行していく技術

戦略といっても多様な分野があります。  
近藤さんはこの3つのうち、どれに向いていますか？  
近藤さんの会社は、いま何が必要でしょうか？ この機会をぜひご利用ください。



このような類のメールやお手紙、広告などを、皆さんもよく目にすると思います。

## 2. 人間の極大化への試み (大学明明徳)

人間が自分の機能を大きくしようとしている試みが何万年も続いております。  
その結果、人類の機能は世界中のどの動物をとっても一番になりました。

例えば、空を飛ぶ力 …

鷲      コンドル      <      航空機

殴る力      …

ゴリラ      ワニの尻尾      <      拳銃やミサイル

どんどん機能を極大化してきております。

また、心を知的に豊かにしようと思う人がいるから大学も存在するのですが、学ぶ時の心も変わって参りまし

た。

中国の古典に大学明明徳という言葉がございます。古来より大学とは明徳（常識）を更に明らかにし真理に近づいていく探求の場でした。

ところが今の学生、仕方のない面もありますが、どんな職に就いたら儲けるかを考えてしまう。

そして、褒められる人とは、この世の中をその人の能力で動かす影響力の大きい人。機能が敏腕で長けている人。大きな人を養おうとしています。これは科学、工学、だけでなく、法律、経済、文科系の学科までもそうやって来ております。

人間の心は今、事物の中に入ってその機能を大きくする方に養われています。

心そのものよりも物質の動きのその只中に心が沈んでいかなければならない世界です。

今、私たちは物質的な世俗的機能をどんどん拡大していかなければならない場にあります。

### 3. 童の心で (『三王来訪』の物語)

「今から20年位前のこと、

動物たちの王が集まって会議を始めました。

そして、その中で3人の動物の王が

どうしても私に会いたいと訪ねて来た時のお話です。

『三王来訪』……………

けだものの王さまたちが会議をするようになった。

けだものたちがみな困りだして、王たちの会議を要求したからだ。

「空や、森や、谷や、川に、いや海の底、山の頂までも、  
人間の影が映る。

何十年かすると、困ることがおこる。」

という。

それで、人間とも会議をしたくなつたといって、

3人の王の代表者たちが私のもとを訪れた。

まじめで思いつめた悲しげな顔をして…

人間たちが素直に戦うなら、われわれも戦いますとっている。

この王たちは遠い祖先のように、

人間も正義の徒だと信じて、

何千年も、いや何万年も我慢して忍んできたのだという。

この王たちは書状をたずさえ、私に

「人間の王になってください。」と頼みにきたのだ。

そして、「正々堂々と戦うことにしてください。」と

話し合いにきたのだ。

まあその辺の小さな国の王さまならやれぬこともあるまいが、人類の王は無理だ。

断るしかない、と答えたら、

残念そうに、失意を浮かべた瞳で、

「そうっと、物陰から速く刺したり、落とし穴を作ったり、

わなを仕掛けたりして、動物愛護などと言わないでください。

われわれのように 正直であってください。」

.....

#### 4. 20世紀 ( 科学技術と人権 )

16世紀 160万人

17世紀 610万人

18世紀 700万人

19世紀 1,940万人

20世紀 (※) 10,780万人

(※) ~86年まで

これは何の数かお分かりになりますか。

これは戦死した兵士の数です。空襲などで亡くなった人の数は入っておりません。

20世紀は、人を幸福にするための色々な科学技術が発達致しました。

また、人権が本当の意味で確立されて参りました。

その20世紀がこれだけ多くの戦死者を出しています。

有史以来19世紀までの総計よりも、20世紀に入ってから86年間の数の方が圧倒的に多い。

人に幸福をもたらすはずの科学技術を使い、人権の基礎である人命を奪っています。

人間は、生きるための本能だけで、モラルを破り法律なんてものをうち立てています。

動物たちは余程のことがない限り、自分達で殺し合いは致しません。

正々堂々と戦っていて仲間同士裏切ることもなく、また降参して白いお腹を見せているものにそれ以上は痛めつけません。

もし動物に言わせれば、人間くらい卑怯で卑劣なものはないでしょう。

私どもは何をしたらいいのだろうと考えざるを得ません。

人間の生きている限りのこの世界を、せめて人間同士が平和に生きていこうと考え、

カントは『世界永遠平和の法』を書きました。これはEU理事会の必読書にもなっております。

私は、自分の考えとして出てくる結果が、動物たちに恥じないものにならないと考えました。

動物たちの瞳を見ると、純明であって、何をしでかすかわからないけれど、はすかいにものを見ず真正面から見ている気がします。

今の世紀、われわれはいつの間にか ものはすかいに見るようになってきました。

そして、それが評価される。

世の中に迎合している人に富や名誉も流れてゆきます。

先人の書いた古典を読んでもよと本に向かうと、いつも先人からしかられているような気がします。

「なぜ正直な目で見ないのか。」と。

そうすれば必ず難しいところにぶつかって倒れてしまうことも多いです。けれども、

「動物たちのような純明な瞳で、まっすぐ読みなさい。まっすぐ 読みなさい。」と。

#### 5. 輝きとしての美 ( 美の存立 )

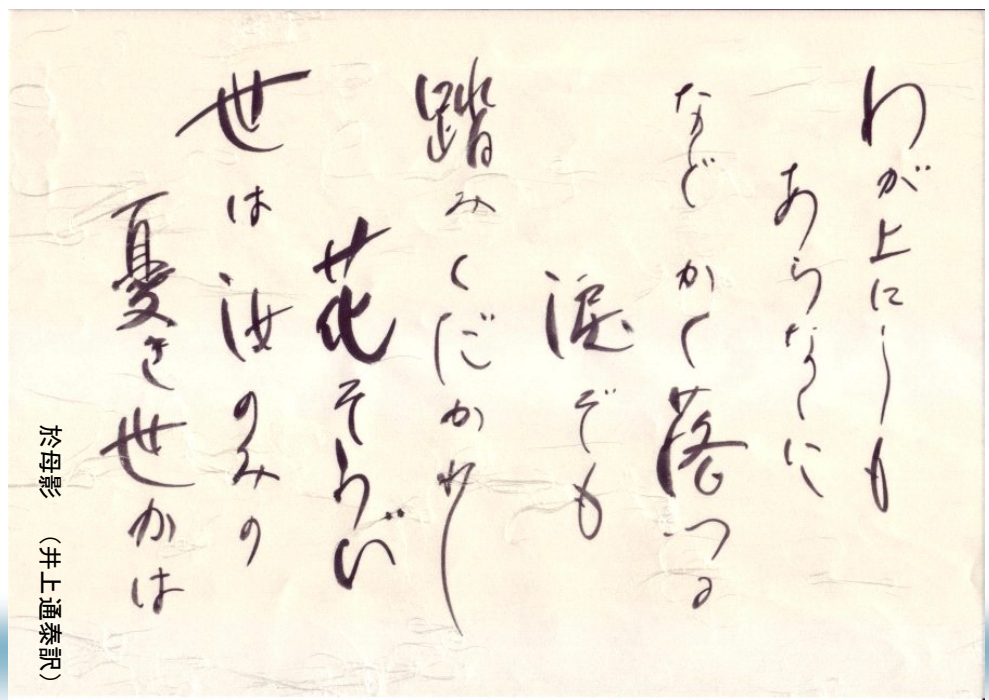
『 春の嵐が去ったあと… 』

倒れていた庭の花を  
ただ水を張ったガラスの器に浮かべただけで  
こんなミニ生け花になって。。  
しばらく目を楽しませてくれる  
こんなことして楽しむの．．．人間だけだよな？なんて  
ふと思ったりする  
もし．．．  
僕の心の余裕さえあれば  
身の周りには  
美しいものが数え切れないほどある．．．

ということ。。

理念の中で一番身近にあるものは、美だと思います。  
美しさといえば宝石や絵画等ありますが、これらもいつの間にか値段に還元されています。  
機能の対極にあるはずの美も、いつの間にか現象の中に埋没しています。  
そこで私は、「ものを離れて美を打ち立てなければならない。」と考えました。

『 花薔薇（はなさうび） 』



わがうへにしもあらなくに  
などかくおつるなみだぞも  
ふみくだかれしはなさうび  
よわなれのみのおきよかは

「於母影」（明治22年）所収

これはドイツの宗教詩人カール・ゲーロックが書いた詩です。

自分のことではないのに、どうして流れ落ちてくる涙であろうか。

もう踏みくだかれてしまった（売春婦）。でも考えてみると世界には同じような苦しみはいっぱいある。

嘆いていてもどうすることもできないのはわかっているのに、涙が溢れ出てくる。

想像することもできないような夜のきらびやかな街で街灯の影に佇むストリートガール。

街角ですさんだ顔をして立っているその人を見るとき、おぞましい、汚らわしいという気がする人もいるでしょう。でも、その人の身になって考えてみれば…

年を重ねると、人間の持っている哀しみが解って参ります。

その人の身になって考えてみれば…

暗い影に立って、通っていく人に媚を売ろうとしている姿を想像し、いろんな気持ちがあったのだろうなあと思ひ描くことができます。

これが生成する力です。

詩集という本の中に沈んでいる時には見えなくなっているのに、一遍の詩を読めば、忘れていた心が蘇ります。

人間だけが、頭で考え理解していく内に、この詩人と同じ様な涙が出てくることがあります。

一度その詩の中に入っていくことが出来れば、そこには存在を超えた美が現れ出でて参ります。

これこそが美の生成運動の極点。

知的な心を持つ人間にのみ可能なことです。

空間を移動すればその度に、そこには無かったものが生成して参ります。

動物にはそのような事はできません。

これが出来るのは、人間に理性があるからです。

猫は知って汚い布団には行かないといいますが、犬や猫の美的経験とは違う、理性に関わる美的経験です。

これは人間にのみ与えられています。

これこそ人間の極大化。

こういう心の力が忘れられて、心の機能のみが必要とされる今の世界。

立身出世というのは機能主義の考えで、（働かなければならない世の中ではありますが、）

少しでも 世界を、自分の行為を美しくしてゆく。

一つの微笑み、一遍の詩を読む、一服のお茶をたてる、美の輝きは色々なところにあると思います。

心の広がりの中に、美の輝きが見えて参ります。

物に埋没しているときには考えることも出来なかった。

心がそれを思うことなくしては出てこなかった美の存立。

知性を働かせて、機能ではなく、精神の力を大きくすることをもっと考えてみるべきではないでしょうか。

『 論語 』より

子曰、興於詩、立於禮、成於樂、……

【語釈】

子の曰わく、詩に興り、礼に立ち、樂に成る。

先生がいわれた、「(人間の教養は)詩によってふるいたち、礼によって安定し、  
音楽によって完成する。」

孔子はその藝術論で、「興於詩 立於禮 成於樂」と申しました。

これは私の考えですが、

詩を学ばなくては、大切なことを言うことが出来ない。しかし詩は、意識の枠を超えることは出来ない。

(詩は意識の中に存在するものです。)

禮を学ばなくては、たとえ詩によって精神が一旦は高いところへ行くことが出来ても、人はそれに向かって立ち上がることは出来ない。

典礼において人は、詩によって獲得した天への想いを演劇の形を持って行為的に表現する。しかし演劇には時間的、空間的制約があります。(世界の内に存在)

詩を鑑賞することで精神が高みに向かう。そして典礼を行うことで、その精神を現実の世界に立ち上げてくる。しかしその現実世界というものは、時間と空間の制約を受けている。そこで樂(音楽)に成ると続けます。

孔子は音楽の形式上の中心をリズムとメロディに置いています。リズムは時間性を持っており、そしてメロディは空間性を持っており、

つまり、

音楽によって、世界の基本構造である時間と空間を自分の中に取り込むことで、人間の精神は自由と開放の極地としての超越を完成すると申しております。(世界超越)

これはすばらしい藝術論だといつも感嘆するのですが、私は何かが足りない様な気持ちが心のどこかで致しております。

かのキケロは、友情こそが最高の徳だと私たちに勧めております。

「友情こそが倫理を育てる。」と申しております。

庭先に来た春の訪れの美しさを友に伝えたくて押し花にして、同じ感動を共有したい。

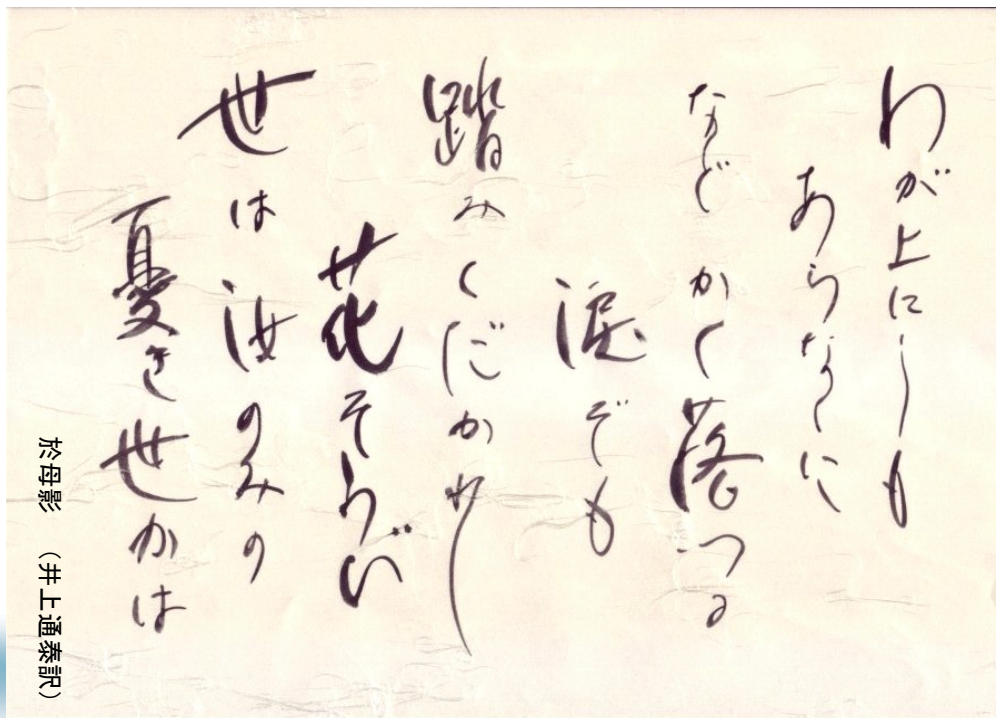
自然を愛で、友を愛でるこんな気持ちがあったから今、僕の手元にあるこの2枚の押し花。

〈押し花の贈り物〉



友からの美しい「心の贈り物」です。

先程の書もまた、私の友が書いてくれたものです。



私のこのお話のために、その詩人の心を一生懸命理解しようと努め、書いていただきました。どんな達筆で書かれたものよりも、私には美しい書のように思えるのです。

音楽、自然、詩、そのもの自体の持つ美しさをさらに超えていくことを可能にしてゆく「友の心のアソート」。様々な美的経験がございますが、その基軸に友情を織り交ぜてゆくことで、美の世界をさらなる高みへといざなうことが出来るのではないかと思いました。

孔子のように一人で超越を予感したところで、あなたはそれで幸せなのですか？と一抹の寂しさを覚えます。癒されたり、甘えられたりする場所…

愛する人や友がいて、初めて美しさが意味のあるものによってゆくと思えます。

友情を基軸に、藝術をその方法論としての実践美学を実践してゆくことが出来れば、素晴らしい職場になるよ！と先人達が教えてくれているような気が致します。

## 7. 孔子の言葉

『 論語 』より

子曰、里仁為美、……

仁におらば、美を為す。

PS委員会に当てはめて訳しますと、

友愛を基本に倫理運動を実践していくと、「人格としての美」があなたに備わってきますよ。と解釈できると思います。

自分の身の周りの全てを、世界中を、癒されたり、甘えられたり出来る場所にして行きましょう。

でも…

甘えるには勇気が必要です。

人を信じる勇気が。

この委員会、そして職場は、

その勇気をともに磨いて行くことの出来る場所ではないでしょうか？